

## ギリシア人の世界

### アテネのアクロポリス

アテネのアクロポリスは海拔 150 ｍ、アテネ女神の神殿パルテノンの土台である。彫刻家フィディアスがアテネ女神像を作り、女神の家の建築も監督した。民主制の盛期、ペリクレスの時代の造営である。

### ●トロヤ戦争

“兜きらめくヘクトール” “白い腕（かいな）のアンドロマケー” と決まり文句が鮮やかに攻め手のギリシアの英雄や守り手のトロヤの女たちのイメージを喚起する叙事詩「イリアス」とその姉妹篇「オデュッセイア」は、紀元前 8 世紀の詩人ホメロスが現行の形にまとめた民族の伝承文学である。ドーリア人南下の直前、紀元前 13 世紀後半、ギリシア人は小アジア半島北西端の城市トロヤを攻撃した。この事件ののち、ギリシア史は暗黒時代に入る。その間、トロヤ遠征の伝承はゆっくりと熟成した。

トロヤ遺跡は、1871 年、シェリーマンによって発掘された。遺跡はローマ時代のものにといたるまで幾層も重なっていて、イーリオンの流れのほとりのこの土地に堆積した時の経過を想わせる。クレタ、ミケーネ両文明を含めて広くエーゲ文明と呼ぶべき青銅器文明の一つの展開を、我々はホメロスの叙事詩とトロヤの遺跡に観察することができる。

陽光のエーゲ文明は“海の民”の侵入、ドーリア人の南下と騒然とした紀元前 12 世紀、“暗黒時代”へと溶暗する。その闇が吹き払われた紀元前 8 世紀以降、ギリシア人は“ポリス社会”を運営し、地中海全域に植民活動を展開する。農業に加えて商業による利得の可能性が拡大した。絵付けの陶器、オリーブ油を輸出し、黒海方面から穀物を輸入する。当然、ペルシア帝国と摩擦が生じる。“ペルシア戦争”である。戦後のポリス社会は民主制の段階に入った。

ポリスの成立

植民活動の時代

重装歩兵の出現

僭主政治

ソロンの改革

アテネ民主制

500 頃ペルシア戦争 ～479

431 ペロポネソス戦争 ～404

387 アンタルキダスの和約

334 アレクサンドロス大王東征 ～323

ヘレニズム時代

146 ローマの属州となる

63 セレウコス朝滅亡

30 プトレマイオス朝滅亡

## 1. エーゲ文明

エーゲ海の受け皿のような形のクレタ島は、エジプト・シリア方面の高度な文明の影響を受け、紀元前 3000 年紀のなかばにはすでに青銅期文明を展開した。前 2000 年紀にはいるとクノッソスの宮殿の王ミノスは強大な海軍を擁してエーゲ海上を支配したとギリシア神話は伝えている。

クノッソスの宮殿にはミノタウロスがすんでいたと伝えはいう。半人半牡牛の怪物である。大地女神が信奉され（その象徴が双刃の斧“ラビリント”で、宮殿自体がそう呼ばれ、その複雑な構造から“迷宮”という意味がその言葉に与えられた）、鳩や蛇が信心の対象になっていたことは農業と牧畜を示唆するが、他方、王宮の壁面にはイルカなど海洋文明のイメージが見られ、全体に明るく平和的で、エーゲ海に向かって開かれた文明であったことを思わせる。

文字もつかわれていて、まだ解読されていないが、これを線文字 A と呼ぶ。クレタ島の北西のペロポネソス半島に、紀元前 1600 年ごろからミケーネをはじめオルコメノス、ティリンスなどに王宮が成立した。ここに成立した文明をミケーネ文明と呼ぶが、そこで使用された文字が線文字 B といって、クレタ文字と同種であるということからも分かるように、これはクレタ文明の影響下に成立した文明であった。

クレタ文明は、クノッソスの王宮が城壁を持っていなかったことや、墓の副葬品に刀剣が出ないことから分かるように、永く太平を享受した平和的文明であったが、ミケーネ文明は、金製品や刀剣類の副葬品、“ミケーネ城砦の獅子門”に代表される堅固な城壁の遺構、あるいは壁画や浮彫り彫刻の図柄などからみて、戦闘的性格が強い。1952 年にヴェントリスによって解読された線文字 B 文書によれば、ミケーネ文明の諸王国は、官僚機構を通して王国内の生産と貢納が管理されるオリエン特型の政治体制をとっていた。

ミケーネ文明は、紀元前 2000 年紀に入るところからギリシア本土に南下を開始したギリシア人諸族が先住民族とともに作りあげた文明であったが、紀元前 1200 年ごろ、突然崩壊した。各地の王宮がほぼ同時期に破壊され、これは天災だったのではないかという説さえ出ているくらいなのである。この時期に、新手のギリシア人であるドーリア人の南下とともに、鉄器時代が始まるのだが、これと前後して“海の民”と呼ばれる人間集団が南下した。これがミケーネ文明を崩壊させた犯人だったのではないかとする意見もある。

## 2. ポリス社会

ドーリア人の南下以後、ギリシア史は暗黒時代に入る。暗黒時代の末、紀元前 9 世紀に

なると幾何学様式文様の陶器が出現し、フェニキア人に学んだ文字に母音表記を加えて作ったアルファベットが使われるようになっていた。

ホメロスの叙事詩「イリアス」「オデュッセイア」は暗黒時代の社会相を映している。王は貴族の一人に過ぎず、貴族の集団指導体制の下に集住（シュノイクスモス）が行われ、都市国家（ポリス）が成立する。紀元前8世紀なかばに貴族政治の体制が確立した。

紀元前8世紀は植民時代である。小アジア、黒海沿岸、エジプト、リビア、シリア、イタリア、シチリアに植民ポリスが形成された。貴族の商業活動の舞台であり、平民の土地財産獲得の場であった。

紀元前7世紀に軍事技術の一大革新があった。重装歩兵制である。これは財力ある平民が軍装自己負担で構成する軍隊で、丸盾と槍で武装し、密集隊形を組んで戦う。軍事を独占してきた貴族の威信が揺らいだ。平民の味方を称する貴族の指導者が現われた。これを僭主（テュラノス、英語でタイラント）と呼ぶ。平民の軍事政治への進出が僭主制を生んだ。

どのポリスでも僭主制の時代に水道や公共施設の工事が進展した。アゴラ（広場）が整備され、アクロポリス（ポリスの丘）に石造りの神殿が建造されて、公の祭祀が推進された。ポリス共同体の意識固めである。劇場の建造と悲劇の競演もこの時代に始まった。

アテネの場合を見てみよう。紀元前6世紀はじめ、貴族と平民間の“調停者”ソロンの改革、次いで同世紀なかば、ペイシストラトスの僭主時代を経て、同世紀末、クレイステネスによって民主制への道がきり開かれた。

クレイステネスの改革は、貴族の勢力基盤を分断するのが狙いの行政区（デーモス）の設置、五百人評議会と十人の将軍職の創設、それに“陶片追放”（オストラシズム）であった。ここに平民の政治的発言権が格段に増大し、さらにこれを助長したのが、その直後、紀元前5世紀前半のペルシア戦争であった。

紀元前490年、アテネ北方のマラトンに上陸したペルシア軍を撃破したのは、ミルティアデスの率いるアテネの重装歩兵隊であった。次いで紀元前480年、再度来攻したペルシア軍は、陸上ではテルモピレーの戦いにスパルタ王レオニダスの率いるラケダイモン（スパルタ）勢を打ち破ったが、海上の戦いはコリント地峡南のサラミス水道でアテネの海軍に屈した。アテネ海軍300隻といわれる軍船の漕ぎ手を提供した無産市民層の政治的発言権が増大した。

ペルシア戦争後、ペリクレスの指導の下にアテネ民主制は最盛期を迎えた。市民権を持つもの全員で構成する民会と、市民のあいだから抽選で選ばれる陪審員で構成される民衆裁判所が国政の決議機関となった。役人も任期一年ということで、抽選で選ばれた。

徹底した主権在民と批評されるが、しかし、市民権はアテネ人を父母とする成年男子に限定され、紀元前5世紀後半、市民の数は3万5千人、それに対して奴隷人口は10万人という数字がある。ポリス社会は奴隷制社会だったのである。

アテネと対照的なポリスと考えられているスパルタの場合も、軍事技術を独占した市民

団としてのスパルタ人が、おなじドーリア人だが、周辺の土地に住み着いた自由農民を支配し、原住民や征服したポリスの住民を奴隷として使役するという体制をとっていて、体質的にはアテネと同じといえる。しかし、アテネが民主政治を理想として掲げたのに対して、スパルタは、貴族寡頭政治を保守しようとしたという点で、両者は異なる。

ペリクレスの末年、アテネを盟主とするデロス同盟と、スパルタを盟主とするペロポネソス同盟の対立が、紀元前 431 年、ついに破局を迎えた。ペロポネソス戦争である。開戦直後、ペリクレスを失ったアテネでは、有能な指導者を欠いて世論定まらず、いわゆる衆愚政治に墮した。紀元前 404 年、アテネは降伏して、スパルタの軍政下におかれた。

ひろい範囲にひろがった戦火は、中小自由農民を没落せしめ、アテネの海軍力を失ったことが、ポリス社会の一体性を弱める方向に作用した。諸ポリスに対するスパルタの干渉はいたずらに反発を招き、紀元前 4 世紀なかばまで、慢性的な戦争状態が続いた。

### 3. ヘレニズム

紀元前 4 世紀前半の慢性的な戦争状態の過程で、ペルシアと同盟を組んでまで（アンタルキダスの和約、前 387）覇権を維持しようとしたスパルタは、ついにその座をテーベに譲り渡したのだが、ヘラス（ギリシア世界）の連帯感を失って四分五裂するポリス社会に、もはや一ポリスの威信は及ばなかった。

そこに現れたのが北方の雄マケドニアであった。マケドニアはギリシア系部族の建てた国家であったが、ポリス型社会へ展開することなく、紀元前 4 世紀のなかば、フィリッポス 2 世王の代に、中央集権的軍事国家へと急成長したのである。

うしなわれたヘラス意識は、皮肉にも、フィリッポスが取り戻してやったかたちになった。紀元前 338 年、南進したフィリッポスはカイロネイアにアテネ・マケドニア連合軍を撃破し、翌年、全ポリスの代表をコリントを集めて、同盟を組ませたのである。これをコリント同盟あるいは“ヘラス同盟”という。

ここに全ギリシア世界の指導者の地位についたマケドニアは、紀元前 336 年、フィリッポス不慮の死後、その息子アレクサンドロスの代、東方ペルシアとのあいだに覇権争いを繰り広げる。紀元前 334 年、アレクサンドロスの東征の開始である。

ヘレニズム時代の幕開けである。ヘレニズムとは“ギリシアふう”の意であって、オリエント的な生活と文化にギリシア的な生活と文化の様式が影響を及ぼした事態を指す。なるほど“ギリシア都市の行進”と批評されたほど、ギリシア人が多数東方に入植した。各地にアレクサンドリアと呼ばれる町が出来た。エジプトのアレクサンドリアがその一つである。けれども、逆の影響も無視できない、宗教、学問の分野におけるオリエントの寄与の大きさが指摘されている。

アレクサンドロスはペルシアを滅ぼし（前 330）、東はインダス川流域まで征服した。アレクサンドロス死後（前 323）、いわゆるヘレニズム三国の成立を見た。マケドニアとギリシアのアンティゴノス朝、シリアを拠点とするセレウコス朝、エジプトのプトレマイオス

朝である。その他、小アジアのペルガモン王国、中央アジアのバクトリア王国、イランの  
パルティア王国などがセレウコス朝の旧領に次第に自立した。